10.　　2005 年 06 月（通巻 69 号）

アダム・スミスが「諸国民の富（国富論）」を発表したのは 1776 年。彼は、経済が発展すると、慈悲深い「神の見えざる手」に導かれて、富は人々に満遍なく行きわたる、と説いた。良い新事業を探し当てた人がいても、それが儲けの良い商売なら、俺も我もと多くの者が参入して「競争」になるために、彼の独占は長く続かず、価格は下がり、結果的にその利益は人々に広く還元されるというのだ。

これに対して、本当に人々が豊かになったとすると、彼らは安んじて子作りに励み、増えた人口によって土地も物価も上昇し、究極的に地主と資本家を肥やすだけで終わってしまうと、1798 年にマルサスは「人口論」の中で反論した。

だから、経済のことは神に委ねるのではなく、民衆の手で計画的に行われなければならないと熱烈に説いたのはマルクスだった。しかし、その社会主義が崩壊するや、スミスの再来のような「新古典主義」と呼ばれる市場万能の競争主義、非福祉国家主義を唱える人々が台頭する時代が到来した。歴史はちょうど一巡したのだ。

その天王山に「郵政民営化」という主戦場があった。なぜ民営化なのか、いまだ筆者には理解できないが、同種の民営事業である宅配業者と郵便局も競争することが良いことらしい。しかし、待てよ！完全な競争的環境下で競争をするのなら、峠の一軒家には郵便を配達しない方が有利だ。つまり、時として敢えて「撤退競争」ということも含めて「競争」はあり得るのではないか。

一分一秒を争って、他の私鉄との競争に勝つために、安全への投資を忌避してまで頑張った JR 西日本鉄道。あのような悲惨な脱線転覆事故さえなければ、経営者は褒められてしかるべきだった。つまり、「競争」こそ、何にもまして進歩発展の神であり父であるのだ。かくて、ネオコン主義者の競争原理に促されて、過疎はますます過疎に、危険はますます危険へと変化していく。

山梨県では、子供たちの学力向上のために「学区制」を廃止する。広い競技場で競わせることで、学力が上がるという「真理」がここでも強烈に信奉されているらしい。